



## 名古屋友禅黒紋付協同組合連合会

# 江戸時代に生まれた 名古屋の技をいまに伝える

### 伝統の染め技法を一堂に

いまから約400年前に名古屋に城と町が築かれると多くの武士や町人が集まり、さまざまなものづくりがおこなわれるようになりました。尾張地方は古来より織物業が盛んであったこともあり、名古屋でも染色業が発展していきました。

大正3年に染色業者が集まり、名古屋絹布染色組合が設立されました。当時の組合員数は県下に約680名を擁していました。第二次世界大戦後の昭和22年、愛知県洗染商工業協同組合として再出発しましたが、昭和32年、部門ごとに黒紋付の業者は愛知県染加工業協同組合、名古屋友禅のうち手描き友禅は愛知県染創工芸協同組合（昭和57年より名古屋友禅工芸協同組合）、型友禅は愛知県誂染色協同組合として独立します。さらに昭和58年に産業省による伝統産業としての指定を受けるため、名古屋友禅黒紋付協同組合連合会が発足しました。

### 天保年間に考案、紋型紙板締め技法の黒紋付

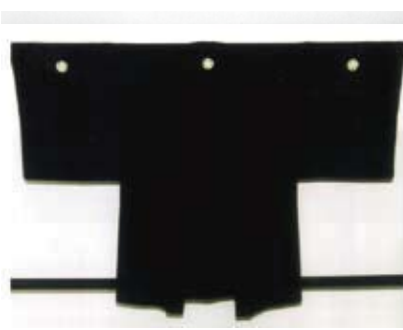
名古屋における黒紋付は名古屋の城下町が整備されている慶長16年（1611）に始まり、天保年間（1830～1843）に「紋型紙板締め」の技法が生まれました。その後改良が施され、現在は和紙を張り合わせてつくられた紙型を紋当金網で布地の両面から押さえつけ、生地を黒く染めた時に紋だけが白抜きになるようにしています。

もともと喪服は黒が用いられていましたが大正四年の皇室令で、宮中参内の喪服は黒無地紋付などと指定されました。そして第二次世界大戦後に汚れが目立たないという理由で喪服専門の貸衣装屋が喪服を黒に統一し、一般にも広がりしました。

### 伝統技法を用いた斬新なデザインの名古屋友禅

元禄時代に宮崎友禅が考案したとされる友禅染の技法を本来の姿で継承しているのが手描き友禅で、いまも下絵に沿って糊を置き、色を押ししていくといった工程の大半が手作業です。そのため、一反の布を仕上げるには3カ月ほどかかります。型友禅は手描きの代わりに型紙を使い、糊を置いて模様を染め上げます。

名古屋友禅は加賀友禅や京友禅に比べ多少地味だといわれていますが、最近は古典的な模様だけでなく、現代風な斬新なデザインのものもつくられています。



#### DATA ■名古屋友禅黒紋付協同組合連合会

所在地：西区万代町1-28

- ・大正3年：染色業者が集まり、名古屋絹布染色組合を設立
- ・昭和22年：愛知県洗染商工業協同組合を設立
- ・昭和32年：愛知県染加工業協同組合、愛知県染創工芸協同組合（昭和57年より名古屋友禅工芸協同組合）、愛知県誂染色協同組合として独立
- ・昭和58年：名古屋友禅黒紋付協同組合連合会を設立